

想
心
出

健
治
追
悼
集



中
川
健
治
氏

九月二十一日 四百

昭和二十八年

一月

冬季合宿、八方尾根スキー行
唐松岳行

伊吹山スキー行

春季合宿、杓子岳、双子尾根登攀

白馬岳登攀

山岳部リレーに推される

叡岳早月尾根登攀

奥穂高岳行

夏季合宿、北岳バットレス第二峰にて遺難

三月

四月

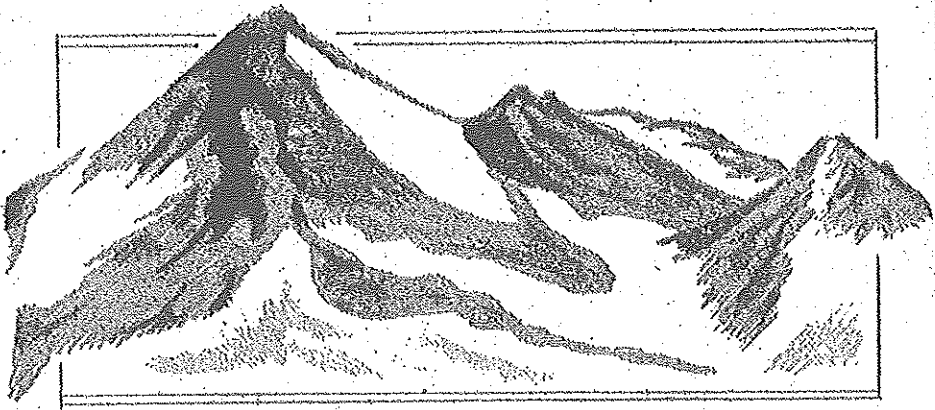
五月

七月

八月

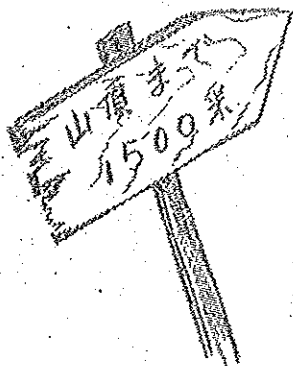
(追記)

捷ちやんが初めて、山へ入ったのは
一九四九、八、最後の山行となった
のも、八八



目次

序 辞	一
遺難経過報告	八
遺 稿	一一
追悼文	二八
山岳部関係	二八
水谷ゼミナール関係	五二
二回生関係(上級生)	五三
三回生関係(同級生)	六一
明和高校山岳部日記編	七七
友人其の他	九四
編集後記	一〇五



弔 辞

一 水谷 一雄 教授

馮母 中川君

この夏休に入つて預もなくゼミナールの友数人と君がリーダーとなつて穂高岳の絶頂を極めたという上高地からの葉書に接して私は君の山岳熱を初めて知つたのです。

その時の君のニコやかな写真を見るにつけその時誰れが今日のような事態に立到らうと豫期し得ただらうか

山から帰れば直に秋の試験に備えて勉強を始めたという君の性格 私は大いに君に期待していたのです

君は天資 英俊 名門 明倫 明和を経て神戸大学経済学部に入學優秀なる成績を以て教養課程を卒えるや今春から私のゼミナールにおいて教理経済学を専攻したのですが本年度私のゼミナールではハンベルタの経済変動理論の共同研究を行うことを発表したところ 春の休暇に名古屋にてその本を見つけたからとて早速手に入れ豫めこれを勉強するという熱心さでした

君は学を好むと共に自然を愛し特に山には異常な執着を持つていました その影響なのでしようか 君は必ざしも多くを語るを好まなかつたが 常に明朗、快活従つて同級の誰れも

から親しまれていました。

寡黙ながら着々として事を進める君。君も亦将来に大いなる希望を懐いてその実現の日を
楽しみにしていたでしょう。御両親もまたどんなにか君に期待して居られた事でしょうが、今
はその縁で空虚しき夢となつてしまつたのです。

君の無念察するに餘あり御両親の御歎きに対しては御慰めすべき言葉もありませぬ。

人の世の明日をも知らぬ儚さを

歎きて懐る子は菩薩なり

明日ありと思ふ心の狭みにて無爲に過す時向多き吾々への無上の警告を心に銘して永遠
の生命。常恒の平和を冀う。白道精進の一步一步を踏みしめ。相なき見舞なきに廻く大活現
前の際。君と相見ゆるの日を期待したいと思ひます。

神佛の恵豊かに君が上にあらんことを只管に祈ります。

昭和二十八年八月十五日

神戸大学経済学部

教授 水谷 一 雄

二、水谷ゼミナール代表

謹んで中川君の靈に捧ぐ。君を知つて僅か二年半にしかたぬ今こうして未知の世界に旅
立ち永久に返らぬ君を偲び乍ら平并を讀まなければならぬのはあまりにも悲しい事だ。
君が宿願とする神戸大学経済学部に入學し、偶然同組に編入され、同じ寮で寢食を共にし始
めたのは実に僅か二年半前にしかならない。そして今は只訃塔と想ひ出の頁にしかめぐり得
ないとは、どのように考へても奇妙で残念でたまらないのです。

あの頃君はお坊ちやんで自分の氣に入らぬことに出發すと無性に腹をたてる気儘もので寺
こずつたものでした。しかし君が不幸にして今度の禍の源となつた山を心から愛していたこ
とは、山のことばは全く知らぬ僕らにとつて大きな魅力でした。山の縁をする時の君の瞳は異
様に透輝き山の美しさを眼前に浮べてでも居るかのようになり、無氣になつて居た腹を想ひ出す
と、實際にリエツクを背負い心から嬉しそうに山に出掛る姿だとか、山には常に死を覚悟し
てはいるのだという君の言葉を如実に想ひ浮べる事が出来ます。あの懐しい寮の部屋には、
君が襟作だと豪語してはぐからぬ此アルプスの専真が今君の靈を偲びつゝ淋しく掛つて居
る事でしょう。

それに君は全く勉強家だつた一番若くして入學の栄冠をかち得た君としては当然の事です。
君の視野は広くその望むところは極めて高く、真面目に部厚い本を丹念にサスノートをとり
下ら執んで、或は絶縁に理論的むことを或は現実の矛盾を憂い、母国の繁栄を念願し、更に
大きく全人類の幸福を願うのを常とするのが君でした。而も教養過程を終えて勇躍として六

甲の学舎で学び始めたのは誠に一年にも満たない前のことでしたし、君の敬愛する水谷先生の教えをうけるようになったのは半年にも満たぬ以前です。それ迄とは違つた新しい雰囲気の中で勉強し始めた君が、君自身のテーマにとりかゝるうとしたのは初とこの休暇ではないか、想えば僕の最後の便りに、いつにもなくケインズもマルクスもあまりにも充墜すぎで批判の余地がないと歎いていたことは、初めしら君の前途には暗示的な響があつたように思えます。

果さずしてこの世を去らざるを得なかつた君に因して、亦、今日出来ることは明日にのびすな。とこれも最後の便りの言葉を、羨とした空虚さと共に胸中に刻みつけて置くつもりです。

勉強家で、山の男としての君は、誰にも増して家と愛するといふ一つの羨しくも羨ましい特徴がありました。多くの恵まれない連中の件にあつて誠に君は素晴らしく恵まれた存在だつたことは君自身も平直に認めて居たし、事実帰省の時の心から幸福そうな態度にも表わして居て、見る人の心に羨望と何時にこの世に生れた喜びの感じをはぐくんだものでした。その最も恵まれた君が、世に通常不幸と云はれる運命の皮肉に見舞はれたことは、友としての僕らは断腸の悲しみと人生の無常を思はざるを得ないのです。それにしても、全く初の苦勞もせず、純真無垢のまま、恵まれた環境のまま、果てることのない旅路に出た、その善だけが残つたものにとつては唯一の慰めのように思えてならないのです。君自身常に語つていたヘルマン・ヘンツとの作中の人物になり切つて生前果すことの出来なかつたさすらいの旅を繰り返して呉れ給え。

君を失つたことは、あまりにも悲しいことだが、今は只君よ永遠に安らかなれと、君の冥福を祈るのみです。

では、僕らの友よ、サヨナラ。

八月十六日

水谷ジミナールを代表して、君の最も親しみつた友の一人

長谷次雄

三、山岳部代表

北岳に遊きし中川君の霊に捧ぐ

北岳の雲の彼方に私達は君の姿を求めて声高く呼んでいる若し白雲の温き花園の内に君を求めむる声が届えたら君は惜まじ幾層の白雲を分けて答えてくれたまへ

それは筑高き君の遊きたのを悼み悲しみ今一度君の顔を声を、と叫び求める私達の叫びなのだから

中川 健治 君

君は白根北岳バットレス登攀中ザイル切断のため一瞬にして不歸の客となられ我等一同驚愕哀惜の念に耐えませぬ

君は高等学校時代より多年山に親じまれ十二分の経験と技術を持ちしかも完全なる準備を

もつて山に登られた。如何に根むくも無い。大自然の定めとは言え、神戸大学山岳部四十年の正史に於てはもとより吾国山岳史にてもかつてない事故のために悲惨な不運事に遭遇された事は痛恨極まりなきところでありませう。

省りみまするに君は昭和二十六年四月神戸大学入学と同時に山岳部に籍をおかれ爾後三年有餘中部山岳地帯の峻険を四季の別なく踏破せられ街にありては旺盛なる研究心の赴くまゝ、各種文献を渉り豊かな知識を体得せられていた。又一方学生の本分を終始忘れる事なく勉学に専念せられ教理経済学のゼミナールにありても常に自ら求めて研鑽されその学問的将来は教授をはじめ幾多の同輩達より嚆矢せられていたのに、
そして又君の温容はその深い教養と共に接する者を温くつゝ、山岳部に於てもこの上ない名リーターとして部員一同より期待を持たれていたのに

嗚呼 今や君の姿はない
思うに世の中に於て尊きものは人命に若くものはなく、これを犠牲としたる事は堪え難き痛恨事でありませう。今や内外多事多端有爲なる人材を切望するの時、君の尊命を悲しみ万感胸に迫るものがあります。ア、痛恨の極みこれに過ぐるものがあります。私達は君の逝去を衷心より悲しみ御遺族の悲嘆に満腔の同情を寄せ、次第であります。

中川 君

君の蔭かれた種は偉大であります。君死すとも君の精神は永久に我等のうちに実を結ぶであります。幽明虎を異にするとも私達は君に友情を胸にあたゝめつゝ、君の志を生かして

その残されし意図の完成を誓うものであります
中川君希はくば心安らかにねむられよ

北岳の岩にからまる白雲よ
汝が奪いたる命をかえせ

昭和二十八年八月十八日

神戸大学山岳部
神戸大学山岳部OB
右代表

金井 健 二



遭難経過報告

南アルプス北岳直下、美しいタンネの林に囲まれた白根御池の畔に、ベースキャンプを設営した私達神戸大学山岳部十四名は、大樽次よりルート偵察の後、八月七日、北岳第一、二、四尾根に第一次アタック隊、三パーティを送つたが、ガス濃き爲ルートを誤り、各々短時間の中に頂上に達し、前期の成果を挙げ得なかつた。

翌八月八日、絶好の快晴に恵まれ、前日と同様のコースに三パーティを送つた。

A 隊 田中、山ノ 一 第一尾根

B 隊 中川、森田 一 第二尾根

C 隊 金井、滝本 一 第四尾根

D 隊 大樽次 一 八本歯コル 一 北岳頂上のルートよりサポート隊として二名

B 隊出発午前五時五十分、之に夫々二十分遅れて、A、C、D 隊が出発した。

前日の苦杯を省みて、各々慎重にルートを取り、落石に悩まされつゝも、順調に登攀を続け、午前九時頃より濃霧が視界を完全に閉ざしてしまつた。第二尾根は最も技術的に困難視され、担当長時間の登攀を覚悟してゐたが、案外順調に高度を繰ぐ事が出来、午前十時二十分最後の難所、カンテをもトツスの森田は苦もなぐ乗り越え、約四十五度の傾斜を有する斜面を約七メートルバース、ハーケンを打ち、セルフビレーの後、ラストの中川の登攀を待つた。ラスト

ト中川は慎重にカンテを登り、岩んど上半身を現わしたが、その瞬間、のせざる様にスリツカシ転落。トツス森田は必死にザイルを手繰つたが、一瞬、有り得べからざるザイル切斷と云ふ事態が発生してしまつた。

一方、A、C 両隊は同時刻に第二尾根で猛烈な落石音の後、森田の救援を求める声を感知したが、ナイフリッジの岩稜に苦悶していたので如何ともなし得ず、A 隊は午前十一時二十分登頂の後、直ちに三本歯コルより大樽次に降り、第二峰に向つた。B 隊森田はサポート隊と共にベースキャンプに戻り、本隊に救援を依頼、直ちに五名を伴つて第二峰に向つた。午後四時、A がリー出合の岩小屋にてC 隊と合流、直ちに捜索に出発したが、第二峰取付点に到るや、猛烈な来雨なり。忽ちガリーは濡状に変化し、敢えて登攀する事は犠牲を更に招くやも知れず、涙をのんで捜索中止、明朝に送引し、今後の対策を次の如く定め、A がリー出合岩小屋にビザークした。

(二) 二名は明朝下山し、左河原小屋小林氏、駒城村観光業部長中山氏に連絡、救援を依頼し、入夫四名による荷上げを懇請する事。更に中川君宅、大学、先輩、残留部員関係に電報の後、一名は名古屋中川君宅におもむき、家波と共に現地へ、一名は帰神して連絡に当る。

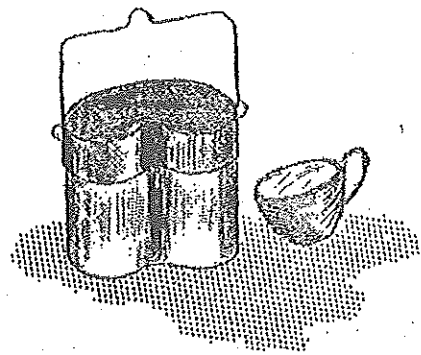
(三) 五名は明朝捜索に従事し、他は之のサポートに全力を盡す。
翌八月九日、前夜の決定に従ひ、二名は下山、五名は捜索のため、第二峰直下、ブルンゼに取付く。取付先の岩壁を約四ピッチ(百二十米)登攀した地点にて中川君の遺体を発見(午前十時)、直ちに二名は岩小屋に下り、他の二名の遺体を求めた後、シエラヲ携行して現場に引返す。直立せる岩壁を苦心の後無事下降し、遺体安置の後、岩小屋に下る。

八月十日、早朝、二名、中川君遺体発見の通報のため日野春に下り、残留員は、遺体を大樽
沢谷谷迄下ろす（午後六時）。

八月十一日、入夫五名ベースキャンプに到着。残留員と協力してベースキャンプ迄、遺体を
下げる。その夜、部員全員、中川君のために通夜に入る。

八月十二日、地元警察署より二名、検視のため到着。検視後、直ちに北岳の巖々たる岩峰を
望見し得る白振御池畔、タンスの林の中で、部員に見守られながら、悲しみの中にダビに付す
（午前九時三十分）。納骨終了（午後一時）後、現場にて嚴寂裡に告別式を挙行。先輩三名
友人一名到着。午後四時二十分、全員ベースキャンプを撤収して、本河原小舎に下る。

八月十三日、本河原小舎―本河原畔―大藪鉾東（午後三時）、御両瓶、駒城村長以下の
出迎えをうけ、慰霊祭を行う。



遺稿

中川君の遺稿のどれだけのせるかということが何題になりましたが、遺稿と申しましても
日記、或はそれに類するものが全部でありますから故人に致しましては御遺族の方に致しまし
ても、その全部を公用しますことは、附えられぬことでもありますし、実に故人の人柄なり、面
影を憶ぶ意味あいではその必要もありませんので、こゝでは、通常の日記と山日記から中川君
が、どのように温くも優しい心の持主であり、大学生活の始りから、どのようなことを學び、
それに噴出し尚中川君が廿五の若さを、神のおぼしめしとは申せ、失うに至つた山、その山え
の愛着がどのようなものであつたかを、読む人々に、判つて頂ける程度に、抜すい致すことに
止どめました。右のことを、念頭に入れて頂いて、以下の中川君の内心の傷りのない叫びを讀
んで頂きたいと存じます。（以下解説は長谷）

一九五一年即ち大学一年当時の中川君は、温い家庭の雰囲気から、種々雑多な事情のもとに
育ち、殆んどは何らかの形で時代の影響をうけている、人々の中に救げこまれて、顕著して行
くのの骨が折れたらしい。四月十四日から六月二十八日までの抜すいは、その向の中川君の傷
りのない調いの、あるいは成長の姿である。

四月十四日 晴

ズーツと続いた僕の日記の白紙の部分は、今日から再びうめられる事になる。しかしこれか